

# いま、私たちにできること

大災害が発生したら、まず、自分の命を守り、次に、身近な人を助け、さらに 避難所の運営など地域に貢献することが大切です。

自分の命を守ることはもちろん、身近な人を守るために、そして、周りのだれかを支えるために、中学生の私たちには、どのようなことができるでしょうか。 今の自分にできることを学び、将来の自分にできることを考えていきましょう。

#### 避難訓練

### 下級生の手を引いて ~津波から身を守るために~

東日本大震災を踏まえ、江戸川区 立船堀小学校では、大地震発生時の 津波の被害を予想し、6年生が1年 生の手を引き、校舎の屋上まで逃げ るという避難訓練を実施しています。

自分の身はもちろん、下級生の子供たちの命を守るために、6年生は、1年生を気遣いながら、一生懸命走って避難します。



平成23年(2011)7月、津波を想定し、6年生が1年生の手を引いて屋上へ逃げる避難訓練(江戸川区立船堀小学校)

#### 防災トピック

## 

平成23年3月11日の東日本大震災において、大津波の被害に遭遇しながらも小・中学生約3千人のほとんどが助かった地域がありました。それが岩手県釜石市です。

海岸からわずか 100 メートルのところにある釜石市立鵜住居小学校では、最初、校舎の3階に避難しましたが、隣の釜石市立釜石東中学校の生徒が校庭に走り出ているのを見て、小学生たちは自主的に中学生のあとを追い、避難場所であるグループホームに逃げました。すると間もなく、グループホームの裏山が崩れたので小・中学生たちはすぐにまた高台の介護福祉施設、さらにその上の石材店まで逃げたのでした。その後津波は堤防を越え、鵜住居小や東中、グループホームにまで押し寄せましたが、小・中学生たちは全員無事でした。

この「釜石の奇跡」を起こしたのは、「想定にとらわれるな」「最善を尽くせ」「率先して 避難せよ」という「避難三原則」でした。釜石市では昔から津波対処の言い伝えとして「津 波てんでんこ」の教えがありました。これは「津波が襲ってきた時には、一人一人が一目散に 走って高台に逃げよ」という意味で、こうした先人の教えが今の時代にも生きているのです。



### 災害時における中学生のボランティア活動

東日本大震災の被災地では、地元の中学生たちが自ら進んでボランティア活動をしています。例えば、岩手県陸前高田市立横田中学校の生徒たちは全校生徒が全国から届いた支援物資の仕分けの手伝いをしました。平成 25 年(2013)の台風第 26 号による土砂災害では、大島町の中学生や高校生が自主的に土砂等の片付けや運搬などを行いました。

また、多摩市立東愛宕中学校の生徒たちは、インターネットのテレビ会議システムを活用し、宮城県気仙沼市の中学校の生徒との話し合いを通して、災害時に中学生にできることについて考えました。

あなたなら、どんなボランティアをしますか。日頃から考えておきましょう。

た。 炊き出しの手伝い/救援物資の仕分け・配送/高齢者の話し相手/子供たちの話し相手/ゴミの収集、運搬 /清掃活動など





平成25年(2013)、台風第26号通過後の中学生による土砂等の片付け(大島町)



インターネットテレビ会議システムを活用 した話し合い(多摩市立東愛宕中学校)

#### 防災トピック

### みんなのために ~3.11 中・高生の活躍~

東日本大震災当日、都立高校 8 校 (工芸高等学校、 竹台高等学校、浅草高等学校、三田高等学校、芝商 業高等学校、本所高等学校、第一商業高等学校、戸 山高等学校)の高校生 356 人は、自らも帰宅困難 な状況となりながら、自校に集まった都民等のため に、ボランティア活動に取り組みました。

高校生たちは、毛布やマット、飲料水を配布したり、食事の用意や配膳をしたりするなど、自分たちができることを行いました。



国道 15号、品川駅付近(午後7時 15分)

また、区立中学校4校(港区立港陽中学校、新宿区立新宿中学校、杉並区立高円寺中学校、 北区立明桜中学校)でも、中学生が備蓄倉庫から毛布等を運び出したり、炊き出しの補助を したりしました。

# 地域の防災訓練に参加しよう(1)

東日本大震災を踏まえ、避難訓練や防災訓練はますます重要になっています。学校や自治会などの地域に密着したものから、東京都が年1回行っている東京都総合防災訓練のように広域にわたるものまで、様々な防災訓練が実施されています。これは、都民一人一人の防災意識を高めて、災害発生時の被害を最小限にとどめるための大事な活動です。また、防災訓練は、地域の方々とお互いに知り合う大切な機会でもあり、積極的に参加することが、地域への貢献につながります。

#### 避難訓練



電柱などの倒壊時、垂れ下がった電線で感電しないよう気を付けましょう。

防災の基本は「自助」です。

まず、自分自身の安全を確保することが大切です。いざというとき自分の身を守るためには、日頃の学校生活で、例えば清掃活動や身の回りの整理整頓など、自主・自立の精神を身に付けていくことが必要です。

避難するときには、壊れやすい建物や屋根瓦が落下しやすい道路の端よりも、安全でがれきの少ない道路の中央を通って避難したり、感電の危険がある切れた電線や倒れた電柱などに近寄らないようにします。



建物の倒壊時、がれきなどの障害物のないところを選んで歩きましょう。 [平成23年(2011)10月29日,東京都・小平市・西東京市・武蔵野市・小金井市合同総合防災訓練から]

## まずは自分の命を守る「自助」





## 消火訓練

震災等の災害被害を最小限に抑えるためには、地域の住民の協力や中学生・高校生などの若い力による災 害対応が必要です。震災等による火災時にポンプを活用した消火活動ができるようになるため、ポンプの設 定から放水までの操作を、自分たちでできるように訓練しましょう。



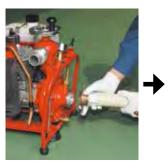
D 級軽可搬消防ポンプ各部の名称 放水弁ハンドル 燃料タンク 吸水レバー 圧力練成計 スロットル レバー 吸水口

ポンプ部

燃料コック

本格的な消火放水訓練を行います。

#### D 級軽可搬消防ポンプ操作要領





エンジン部

① 吸管を吸水口に結合した後、水源に吸管の先を入れます。

② ポンプのエンジンを始動し、吸水レバーを操作し、吸水します。





③ 放水を担当する人は、放水口・ホース・筒先を結合し、火元 までホースを伸ばし、ポンプを操作する人に放水の準備がで きた合図をします。





④ 筒先を持った人から合図があったら、放水弁ハンドルを開き 放水します。水圧による反動力でバランスを崩さないよう、 放水が終わるまでしっかりと保持します。

# 地域の防災訓練に参加しよう(2)

「共助」とは、自分自身の安全が確保できた上で、周りの人を助けることを言います。

自分の力に応じて、できることを無理なく行うことが大切です。防災訓練は災害時のためだけのものではなく、普段の暮らしや学校生活においても、とても役に立つ理論と技術を学ぶ場です。様々な防災訓練に参加することで、いざというときに周りの人たちの安全等を守るための取り組みに貢献することができます。積極的に参加するようにしましょう。

#### 救助訓練

東京都の総合防災訓練では、実際の災害に備えて倒れた柱の下から人を救助する訓練なども行います。日頃使ったことのない自動車のジャッキを使った救助訓練などが実際に体験できます。







1班3人で力をあわせて、実際にがれきにはさまれたダミー人形 (50kg) を救出する訓練をします。このとき自動車のジャッキを使います。

#### 脱出できない人の救出



角材などでてこの原理を利用して持ち上げます。



ジャッキを使って脱出できるすき間をつくります。

## 身近な人を助ける「共助」







#### 救命訓練

人が倒れている場合は、声をかけながらすぐに救命活動を行うことが大切です。

日頃から何回も救命訓練を経験することで、躊躇することなく落ち着いて救助活動やAEDの操作ができる ようになります。これは、普段の生活やスポーツを行う場でも役立つことです。



AEDを使って、2人1組で救命訓練を行います。

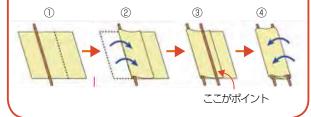


AED は扉を開くと警報が鳴る ので、緊急時以外には触らない ようにしましょう。防災訓練の ときに、しっかり使い方を覚え ておきましょう。

## 簡単な担架の作り方

《用意するもの》

長くてしっかりした棒(物干竿等)2本と、 毛布 1 枚で図のようにして作る。ポイント ははさみ込む毛布の端を図(③)のようにす ること。



## 防災トピック

## 東京都の先生たちも、被災地で活躍しています

東京都教育委員会では、東日本大震災に伴う被災地域への人的支援を行っています。

これまでに、延べ115名(平成24年12月現在)の先生方が、宮城県に派遣され、被災地 の学校で活躍されています。

宮城県の先生方は、御自身が被災されたり、御家族を失ったりしながらも、絶えず、児童・ 生徒を支え続けてきました。派遣された東京都の先生方も、被災地の先生方と協力しながら、 被災地の児童・生徒のために、各学校で活躍しています。

また、学校運営を支えるため、被災地の教育委員会にも、延べ 205 名 (平成 24 年 12 月現在) の東京都教育庁の職員が派遣されています。

# 東日本大震災で活躍した東京消防庁ハイパー

## 宮城県気仙沼市での救出活動



東日本大震災では、自衛隊、警察と共に東京消防庁も多くの部隊を派遣しました。 東京消防庁ハイパーレスキュー隊も現場に駆けつけ、懸命な救助活動を行い、多くの住 民の救出に当たりました。



日頃訓練した重機による救助活動(宮城県気仙沼市)



宮城県気仙沼市での救助活動

# レスキュー隊 行政機関による「公助」 🕲 🔞 🥫







## 東京消防庁ハイパーレスキュー隊とは

#### 〈正式名称〉消防救助機動部隊 平成8年(1996) 12月に創設

版神・淡路大震災の教訓から、通常の消防力では対応が困難な救助事象に迅速に対処するための部隊の必 要性が提起されました。このため創設されたのが、消防救助機動部隊(愛称:ハイパーレスキュー隊)です。 消防救助機動部隊は、特殊な技術・能力を有する隊員と、大型重機など特殊車両などを備え、多数の人命

を早期に救助する ことを目的とした スペシャリスト部 隊で、第二、第三、 第六、第八、第九 消防方面本部に設 置されています。





岩手・宮城内陸地震での救助活動



新潟県中越地震での救助活動



重機を活用した救助訓練



特殊な資器材を活用した訓練

# 東京消防庁ハイパーレスキュー



幅4km、長さ1kmにおよび宮城県気仙沼市の大火災

## 東京消防庁ハイパーレスキュー隊員へインタビュー

東京消防庁第二消防方面本部(東京都大田区)で、消防救助機動部隊の下山部隊長にインタビューしました。下山部隊長は東日本大震災における宮城県気仙沼市の大火災について、次のように語っています。

平成23年(2011)3月11日、三陸沖での大地震の発生を受け、私たちはすぐに東北地方に向かいました。 目的地は宮城県気仙沼市。津波の直後、漏れた重油に引火して、市街地で大火災が発生したためです。

3月12日午前9時、私たちが現地に着いたときには、約4km²の広い範囲で火災が起こっていました。地元の消防隊員と交代する形で消火活動を始めましたが、異様な音とともに爆発が起こり、死と隣り合わせの危険を感じました。

明くる日の13日までには消火が進み、煙が少し残るだけになりました。しかし、火災がほぼ収まったところ、廃折地区の高齢者施設に利用者約100名が取り残されていることが分かり、一人一人を背負って救助しました。

津波や火災で人が亡くなる様子を目撃した利用 者からは「自分が代わってあげたかった」という 声が聞こえ、返す言葉がありませんでした。



大きな被害なので特殊重機が投入されました。

## 隊員からのメッセージ







#### 下山部隊長から中学生へのメッセージ(消防救助機動部隊・部隊長)

消防士になろうと決めたのは、まだ将来の方針も決まらずにいた高校生の頃、消防士の兄に相談したことがきっかけでした。「いい職場だから試験を受けてみてはどうか。」と誘われ、もともと身体を動かすことには自信があったし、人命を救う仕事にも誇りがもてると感じたので受験しました。

幸い合格し、1年間消防学校で授業を受けた後、訓練生活に入りました。訓練は考えていたほど楽なものでなく、途中で何度も辞めたい、逃げ出したいと思いました。ともかく先輩たちに近付こうと必死に頑張りましたが、なかなか追いつけません。何年かたって、自分にも先輩を追い越せるものがあることに気付いたときには、嬉しさがぐっとこみ上げてきました。

訓練中に学んだことは、自分には仲間がいること、そしてその仲間のその力で支えられていると

いうことです。現場で救助活動をする際、地下に対ることもあるのですが、仲間がしっかり握っていてくれるロープと、状況を無線で伝えてくれる仲間がいるからこそ安心して救助に専念できます。つまり、チームワークが自分の冷綱なのです。

私が、隊長として大切にしていることは、正に、この一点。「仲間を大切にして、チームワークを守ること。」このことをずっと、隊員たちと共有していきたいと思っています。





現場でミーティング中の下山部隊長



救急ヘリコプターで病院に搬送

